



## ■ 第4回理事会 終了報告 ■

令和8年3月12日(木)、Zoomにて令和7年度第4回理事会を開催いたしましたのでご報告申し上げます。

まず報告事項として日臨技・他団体関連・組織/研修部会、および各地区の活動状況や第98回北海道医学検査学会の準備状況等について情報共有がなされました。特に、毎年2地区に北臨技役員が訪問して行っている「地区連携会議」については、その目的や在り方について積極的な意見交換が行われました。本会議は、各地区と北臨技の相互連携を深める重要な場である一方、相応の費用を要する事業でもあり、開催時期や手法・各地区のニーズを十分に汲み取り、「費用に見合う

有意義な開催」となるよう検討を深めていく事が確認されました。各理事からは「より有用な場となるよう講習会と同日開催なども検討し継続すべき」との貴重な意見をいただき、来期はこれらを踏まえ、より良い開催形式を模索の上開催いたします。

次に議題として、地区総会への役員派遣や、長きわたるご貢献に対して畑中 宗博氏(北見地区)への特別表彰の授与、新入会員研修会の企画・予算案、および次期検査研究部門員の選出等について審議し、いずれも承認されました。併せて札幌医科大学医学部 感染制御・臨床検査医学講座より依頼のあった「院内感染対策としての環境培養に関するアンケート」への協力も確認いたしました。各施設へ本アンケートの協力依頼が届きましたら積極的にご回答いただきますようお願い申し上げます。つづいて総会議案について説明があり、各種事業とも計画通りに遂行されている事と同時に決算についても、今期は黒字見込であることが報告されました。尚、総会議案は4月下旬に発刊の北臨技会誌に掲載いたしますので、内容をご確認の上、令和8年度総会にご出席くださいますようお願い申し上げます。

(北臨技副会長 下津 達也)

### 第250回北臨技講習会(病理細胞部門)

#### 終了報告

令和8年2月7日(土)に札幌医科大学教育研究棟にて、病理技術者の「匠」Part.17を開催し、66名の方にご参加いただきました。今回は、『画像を学び、武器にする!』というサブタイトルのもと、病理部門において色々な場面で関わる『画像』をテーマとし、マクロ写真撮影技術・ミクロ写真撮影技術・放射線医師による臨床画像の見方・プレゼンテーションの極意・最新のWSIの開発やそれを用いた最先端の研究と将来の展望等について、8名の演者からご講演いただきました。企業の学術部門の方も含め、その道に精通した講師陣からの熱いメッセージが伝えられ、参加者と講師間の質疑応答も活発となり、有意義な講習会になったと感じております。また、今回で17回目となります本講習会は「繋がり場」というコンセプトがあることから、現地での開催としております。当日は参加者の方々が積極的に交流する姿が見られ、アンケート結果においてもハイブリッド形式の方が都合が良いという意見も多々ある中、「実習形式」や「宿泊型研修」も希望する声も見うけられました。満足度に関しては多くの回答者より、「中々学ぶ機会が無かったので新鮮であった」とのお声をいただき、「とても満足」、「おおむね満足」との評価を得る事ができました。しかしながら開催が2月であり、当日まで何度も大雪に見舞われたことから、多くの方々にご心配をお掛けしましたこととお詫び申し上げます。これらの貴重なご意見をもとに今後も有益な講習会を企画していきますので、お気軽にご参加ください。(北臨技病理細胞部門長 佐々木 敏洋)

### タスク・シフト/シェアに関する研修会

#### 終了報告

令和8年2月21日(土)札幌医科大学教育研究棟にて、「あなたの一歩が医療を変える!臨床検査技師の新時代、タスク・シフトの実践」をテーマに研修会を開催いたしました。今年度、タスク・シフト/シェアに関する実技講習会事業は5カ年計画の最終年度にあたることから、これまでの到達点を共有し今後も更なる推進を図る事を目的としました。

研修会では多角的な視点から全7題の講演が行われました。実態調査報告では道内講習修了率が全国平均を下回る現状や施設間での推進意識に温度差がある事、続く実践報告として、神経生理分野では針電極の装着等を技師が担うことで医師の待機時間を削減し手術の効率化に貢献した経過が報告されました。内視鏡分野では看護師との役割分担や医療安全の質向上と組織的な壁の克服など、我々が目指すべき方向性が示される内容でした。CGM業務では臨床側との対話を通じた教育時間の確保とチーム医療への主体的参画の重要性が説かれ、また静脈路確保の取り組みでは看護部門との信頼関係構築を基盤とした業務移管や小規模施設における「地道な実績作り」が制度を動かす力になるという展望が示されました。最後に全国的な動向を踏まえ、事業推進には「意識・知識・余力」の3つの観点が必要であるとの提言もありました。本研修会を通じて浮き彫りになったのは、タスク・シフト/シェアは私たちが臨床の真のパートナーとして専門性を最大限に発揮するために不可欠なプロセスであるということです。「現状維持は後退に等しい」という言葉を胸に、まずは自施設の課題を自分事として捉え直してください。私たちの専門性が医療の安全を支え、今後の患者サービスの向上に直結することを信じています。(北臨技副会長 下津 達也)